

14.

## 旧暦霜月8日(11月8日) 金山祭・鞆祭 (ふいごまつり)



岐阜県垂井 南宮神社 ふいご祭 江戸 鞆祭の様子を描いた図

「鞆祭・古式鍛錬式」 鍛冶屋か? 家の中に鞆が見え、蜜柑まきの様子が描かれている

11月になって「鍛冶屋の祭 鞆祭。まもなくだ。今年是非見に行きたい。」

昨年訪ねた美濃一宮金山彦命を祭る「南宮神社」に電話すると11月8日(月曜日)朝 祭礼とともに古式鍛冶鍛錬式が見られるという。

また、播磨金物の街「三木」では金物祭にあわせ11月6日(土)朝早く 三木城址にある金物神社で鞆祭が古式にのっとり行われるという。

チャンスと三木市金物神社の鞆祭 そして 岐阜県垂井にある南宮神社の鞆祭を見学に出かけました。

## 三木市 金物神社 鞆祭

2004.11.6.



## 岐阜県垂井 南宮神社 ふいご祭

2004.11.8.



「鞆」は金属加工に使う火を強くおこすために風を送る装置。

江戸では 旧暦の霜月8日(新暦でいうと12月初め) 鞆祭の日に、鍛冶師・鋳物師・鋳(かざり)師・時辰(とけい)師・箔打師など鞆を使って金属加工をする職人たちが、お稲荷さんに供物とともにみかんを供える習慣があった。別名「たたら祭」とも称し、仕事を休み、鞆を清めて注連縄を張り、祭壇に新穀・新酒・蜜柑・海の幸を供え祖神のご加護を感謝し、火防・繁栄を祈願する祭りであった。蜜柑を満載して江戸へ運んだ紀伊国屋門左衛門 そして、この日の早朝、蜜柑をまいて近隣の子供に捨わせる「蜜柑まき」の催しが繰り広げられた。



江戸時代の千石船の絵馬

この鍛冶屋の鞆祭に必要なみかんを嵐の中 紀州から運んだ豪商紀伊国屋文左衛門。

「沖の暗いのに白帆がみえる あれは紀の国蜜柑船」の紀伊国屋文左衛門である。

また、日本画家 横山大観は この鞆祭の「みかんまき」の光景を生き活きと書いた絵があるという。

鞆を使わなくなった現在でも、金属加工業者が奉る神社 鉄や金属加工と関係する神社(金山彦命や天目一箇命、金屋子神などを祭神とする神社)では、年に一度 この鞆祭の祭礼に火床を設けて火を起こし鞆で風を送る「金山祭 鍛錬式」または「火入れ式」が行われる。

霜月8日を陰暦のまま行うところと新暦の11月8日、或いは季節感から月遅れの12月8日に開催されるなどがあり、今も各地でこの祭礼が鉄・金物を扱う商工業者を中心に行われている。

鞆祭りの起源は、15世紀の中頃、当時、鉄砲鍛冶の中心であった堺の鍛冶屋が伏見稻荷の御焚の火(霜月8日)に、お礼をうけて鍛冶場に祀る風習が、稻荷信仰と一体となって地方へと拡散したという。そのルーツは定かでないが、次のように語られている。

鍛冶屋、鋳物師、石工など鞆を使う職人たちは、旧暦11月8日を鞆祭と呼び、この日は、一日中、仕事を休み、鞆を清めて、お神酒、赤飯、ミカンなどを供え、守護神の稻荷神を祭った。この行事は、昔、三条小鍛冶宗近が刀を打つとき、稻荷神が現れて相鋸を打って助けたとか、この日の卯(う)の刻に天からたたらが降ってきたので、その記念に祭るのだと伝えている。

一方 12月1日が「鉄の記念日」。

こちらは、1857年12月1日、岩手県釜石の製鉄所が洋式高炉によって鉄の操業を始めました。この洋式高炉によって、日本における鉄の近代的な生産が始まった。日本鉄鋼連盟はこれを記念して1958年、12月1日を鉄の日と制定しました。

#### 旧暦霜月8日(11月8日) 金山祭り・鞆祭 (ふいごまつり)

##### 内容

1. 三木市 金物神社 鞆祭見学記 2041.11.6.
2. 岐阜県垂井 南宮神社 ふいご祭 見学記 2004.11.8

- 参考 1. 紀伊国屋門左衛門 「沖の暗いのに白帆がみえる あれは紀の国蜜柑船」  
参考 2. 「村の鍛冶屋」衣川製鎖工業(株)のホームページより 横山 大観『鞆祭』

#### 参考 1. 紀伊国屋門左衛門 「沖の暗いのに白帆がみえる あれは紀の国蜜柑船」



船絵馬に描かれた「千石船」

貞享2年の秋、みかんの収穫期を迎えた有田川流域では、例年になく長雨にたたられ、その上、海は、暴風雨で荒れ狂い江戸への船便は、途絶えたままでした。

北湊の荷揚場には、黄金色のみかんを詰めた江戸送りのみかん籠が山のように積まれました。

やがて、江戸の鍛冶師達が毎年、旧暦の11月8日に祝う鞆祭に近い。目の前の荒れ狂う海に船出する勇気のある船主はいない。千載一遇のチャンスだ。今江戸へみかんを運べば、巨万の富が得られる。血気盛んな青年紀伊国屋文左衛門は、怒濤の熊野灘、遠州灘へ向けて一身を賭けて船出した。



図1 江戸時代の鍛冶屋（『和国諸職絵尽』より） 図2 江戸時代のふいご祭（『大和耕作絵抄』）

**参考 2. 横山 大観『鞆 祭』**

「村の鍛冶屋」衣川製鎖工業㈱のホームページより

\*\*\*\*\*

**横山 大観『鞆 祭』（ふいごまつり）**

明治30年（1897）頃 絹本彩色・軸装

横山大観記念館蔵

「村の鍛冶屋」衣川製鎖工業㈱のホームページ

「鞆の話」より

<http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/huigo/index.htm>

<http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/huigo/02111.htm>

\*\*\*\*\*

本作品では、子供達が屋根の上から投げられる蜜柑を奪い合う様子が生き生きと描かれている。

我先に蜜柑を拾おうとして、相手の髪の毛を引っ張ったものの、逆に頭を押さえつけられ、お互いに身動きの取れなくなっている少年や、逃げまどう犬の姿から祭りの日の活気が漂ってくる。



横山 大観 『鞆 祭』

旧暦霜月 8 日(11 月 8 日)金山祭り・鞆 祭 (ふいごまつり)

## 14.1. 金物の街「三木」と三木 金物神社 鞆祭 2004.12.6.



日本で最初の「金物の町」と言われる三木市。

神戸から北西に約 30km 加古川中流の播磨の低い丘陵地に広がる戦国大名別所氏の古い城下町である。

「ナイフといえば肥後守」 この肥後守はその名から九州産と思われていますが、三木の組合業者でなければ使えない登録商標である。

この三木市の金物産業は、事業所の規模は 9 人以下が約 80% と圧倒的に家内工業型が多いのですが、三木市の工業生産額の約 32% を占める地場産業である。

現在では、伝統的な利器工匠具類の比率は低下し、新しく工具を中心とした製品が多く開発、生産されています。

### 1. 金物の町 三木

「三木金物」の起源は、今からおよそ 1500 年も昔、五世紀の中頃のこと。

天目一箇命(あめのみひとつのみこと)を祖神とするこの地方の大和鍛冶と、百済の王子恵が丹生山へ亡命してきた時に連れてきた技術集団、韓鍛冶が技術を交流。

すばらしい技術を持った韓鍛冶が三木に住み着いて、鍛冶を行ったのが始まりといわれる。

その後、鍛冶の発達とともに優れた技術を持つ大工職人を数多く輩出し、平城京、平安京の時代から国宝級の建物を手がけるようになる。(日原大工と呼ばれた)

戦国時代に入ると刀剣づくりが盛んになり、中国街道筋の城下町として大いに繁栄を誇った三木でしたが、秀吉の三木城攻めで一旦 三木の古い街並みも、文化の足跡もすべて焼失しましたが、その後、秀吉は三木の新しい街づくりを始め、「金物の街 三木」が、この時から本格的に培われ



てきた。

別所長治の三木城を攻め落した秀吉が、三木の街の復興を進める中で、多くの人々が再び町に帰るとともに、焼失した寺や家屋の復旧のため各地から大工職人が集まり、彼等に必要で大工道具を供給する鍛冶職人が増え、これが現在の発展につながる足がかりとなった。

さらに江戸時代、農閑期になると、大工職人は、京、大阪、丹波、但馬へ出稼ぎに行きました。

この時に持っていった大工道具のすばらしさが他国でももてはやされ、次に行く時には品物をもって売りさばくようになりました。これが、全国を股にかける三木金物卸商のきっかけです。



三木市 上の丸界隈の家並み



上の丸城址公園とそこから見る美囊川の流れ

こんな 三木市の中心麓を加古川に注ぐ美囊川が流れる上の丸の岡の上 旧三木城址に隣接して、昭和10年街の金物産業に従事する人たちによって金物業者共同の守護神として創建された「金物神社」がある。同時に この金物神社の境内には三木市の金物博物館があり、三木金物の歴史展示が常設され、その入口には童謡「村の鍛冶屋」の碑が建てられている。

毎年 秋 11月8日に一番近い週末に街をあげての金物祭が開催され、その幕開けの早朝(11月第一土曜日)金物神社の祭礼として 街の金物産業に従事する人たちによって「鞆祭」(技量、人格ともに優れた匠が御番鍛冶となり年番制で行われるふいごの火入式(鍛造))が催される。

本年は11月6日 早朝 9時から 金物神社でのお祭に続いて、境内にある古式鍛練場で「鞆の火入れ」に続いて「古式鍛錬」が行われた。



三木 金物神社 境内 2004.12.6. 早朝

写真下左より 金物神社社殿 古式鍛練場と金物博物館 金物博物館前の村の鍛冶屋歌碑

## 2. 三木 金物神社韃祭 2004.12.6.



前日電話で確かめると金物神社韃祭の開始は朝8時30分。街は金物祭でごったがえすという。

11月6日 早朝 神戸の家を出て、50ccバイクで三木へ向かう。

神戸の街の北を東西に伸びる丘陵地沿いに走る神戸 三木街道を走って 約40分ちょっとで三木の街。朝早いので、気抜けするほど街はまだ静か。市役所のある丘の広場周辺だけが、金物祭の数々の屋台店の準備であわただしく人が動いている。

上の丸の丘へ上がってゆく道がわからず、一旦神戸電鉄沿いの上の丸の駅前へ出て、古い家並みが続く上の丸の商店街を抜けて上の丸の城址公園へあがってゆくと、林の中にたくさんの旗がはためく「金物神社」があった。林の一角 石の鳥居と石碑の垣で囲まれた境内の中にモダンなコンクリート作りの社殿と金物博物館 そして、これらの間に古式鍛練場があり、韃祭に参列する街の金物工業の関係者であろう30人ほどの人たちが礼服に身を固め、社殿前に座っている。

後は、報道関係の人と僕みたいな野次馬数名。静かなものである。

考えてみれば、町一般の人にとっては、町おこしの「金物祭」は知っていても、韃祭の祭礼など関係なし。ちよつと拍子抜けであるが、ゆっくり見られる。

### 三木市立金物資料館

金物神社の鳥居をくぐると直ぐ正面に立派なコンクリート造りの金物資料館がある。正面に小学唱歌「村の鍛冶屋」の立派な歌碑があり、「ふいご」の形をしたモニュメントを中心に前後に歌詞と楽譜が刻まれている。

朝早いがちょっと時間があつたので、境内のなかにある金物博物館に入れてもらう。

博物館の中には数々の三木金物が、その歴史とともによく整備されて展示されていた。



金物博物館正面にある  
小学唱歌「村の鍛冶屋」の歌碑



金物博物館 展示された三木金物

### 三木 金物神社 鞆祭



9時きっかりに社殿では街の関係者・金物業の人たちによって、鞆祭の神事がはじまつた。社殿に隣接した古式鍛練場には幕が張られ、鞆と炉には神かざりがつけられ、掃き清められた鍛練場の端には、「蜜柑」がお供物として奉られている。社殿での神事後の火入れ式・古式鍛練を待っている。三木の匠が御番鍛冶となり、小刀の古式鍛練が行われる。社殿での神事が終わり、神主の手で採火された火が、古式装束に身を固めた御番鍛冶の手に渡され、古式鍛練場の鍛冶炉に移された。そして、匠の手で鞆の風送りが始まった。

ふいご火入れ式 2004.12.15.



いよいよ 火の中に地金を入れられ、加熱が始まる

ほう酸などの成分を塗った地鉄に刃となる鋼片が重ねて 炉に入れられ、加熱が開始されて小刀の鍛練が始まる





### 鍛造 水打ち

数回に分けて 加熱鍛造が繰り返された後、棒状に素延べが行われ、真ん中で斜めに刃が打ち込まれ、二つの小刀素材に分割され、火作りに移ってゆく。

金槌や金敷が水につけられ、赤い素材に打ち下ろされる。の時に瞬間的に発生する水蒸気が表面にある滓などを吹き飛ばしてゆくという。

この加熱鍛造工程は水打ちとも呼ばれ、地鉄に刃鋼が接合されるとともに、表面のスラグや不純物がたたき出される。

そして 火作りに入り、刃の部分を含めて、金槌で小刀の形に厚さ・形が整えられてゆく。

そして 仕上げ鍛造がなされ、加熱後 横に置かれた水の中に焼き入れ・セルフの焼き戻しが行われ、約 30 分ほどで、古式鍛造が終わった。

どんな儀式だろうと、興味深々であつた鞆祭。

こんなに身近で、しかも人に邪魔されずに古式鍛造の現物を見たのも始めて……。ラッキーでした。

また、江戸期 江戸の鞆祭のために嵐の海をついて、紀の国の蜜柑を宿へ運んだ紀伊国屋文左衛門。

その「蜜柑」は現在の三木の鞆祭でも、古式鍛練場の横に備えられていた。

鞆祭を見た後、静寂の上の丸の城址公園をぶらぶら歩いて、街に出ると街は各地から 15 万人もの人が集まるといふ「金物祭」でごった返していた。

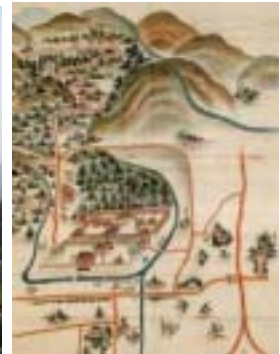
2004.11.6. Mutsu Nakanishi

旧暦霜月 8 日(11 月 8 日)金山祭り・鞆 祭 (ふいごまつり)





## 14.2. 岐阜県垂井 南宮神社 ふいご祭 2004.11.8



### 1. 南宮大社と鉄

鈴鹿・養老と伊吹の山々の狭い谷間に広がる関ヶ原を抜けて、美濃平野への出口が垂井。広大な美濃平野の北西の隅にあたる。この鈴鹿・養老の山々の裾に南宮山があり、そこに南宮大社がある。

垂井駅から南西約 1km の位置である。

南宮山は不破山とも呼ばれ、美濃の仲山の名で万葉集や古今集に詠まれている。

後に南宮山のある鈴鹿・養老の山々と対峙して北側に立ち並ぶ伊吹の山裾に美濃国の国府が置かれ、南宮大社の場所が、国府の南に位置するところから南宮大社と呼ばれるようになった。

鉄と関係深い金山彦命を主祭神に、美濃国一の宮として、また、全国の鉱山、金属業の総本宮として今も深い崇敬を集めています。

社伝では、神武天皇即位の年の創建とされるきわめて古い神社である。

慶応 5 年（1600）の関ヶ原合戦で社殿のすべてを焼失。寛永 19 年（1643）、3 代将軍徳川家光が再建したといわれています。

広い境内には本殿・拝殿・燐門など、朱塗りの華麗な姿を並べ、江戸時代の神社建築の代表的な建物 15 棟が国の重要文化財に指定されている。



『 この地になぜ出雲系の鉄の神金山彦命が祭られる大きな神社があるのか ?????? 』  
この点については良くわかっていないが

垂井の町を東西に流れる相川をはさんで北側の伊吹山麓の井吹の集落は、古代の鉄に関係した渡来人伊福氏の本拠地。鈴鹿と伊吹の山の間を吹き降ろす伊吹嵐を使って、たたら製鉄が始まるその以前に「先たたら古代製鉄」を伝えた場所でないか考える人もいる。

また、この垂井のまちから北東に延びる古代の東山道(中仙道)を少し行くと古代の美濃国府があり、その後背地には古代より赤鉄鉱を産出した金生山があり、その麓には前方後円墳が連なる赤阪古墳群がある。ここも 金生山の鉄を背景とした古代豪族の根拠地ではないかと言われる。

まさに南宮神社から徒歩でも2時間もかからない範囲に直接的ではないが、古代鉄の痕跡が点々である。

さらに、南宮神社のある南宮山も「美濃の中山」と呼ばれた地。

これも古代鉄の王国吉備「真金吹く 吉備の中山」を思い浮かべる。

「この地は古代鉄の先進地であったのではないか?? そして、その鉄の先進地の守護の神として、南宮大社が建てられ崇拝されてきたのではないか????」と。

私はそんな風に今は考えている。

美濃一宮であると同時にそんな鉄の歴史を秘めた南宮大社は 全国の鉱山・金属業の総本宮として広く崇敬を集め、11月8日 盛大な「金山祭・鞆祭」が催され、この日には日本各地から数多くの金属・鉱山業の人たちが、参拝に訪れる。

## 2. 垂井駅から南宮神社へ 2004.11.8.早朝

朝10時からの鞆祭に間に合うように一番の快速電車で飛び乗り新快速に乗り換えて米原へ。

米原から大垣行の電車で約30分 9時前に垂井駅に着く。

一度 昨年来たことがあるので、今日は余裕のWALK。

今日は 南宮神社で鞆祭を見て、後は 足任せ・・・ 美濃路を鉄を訪ねてぶらぶら walk。

前回 夜になってしまった井吹の里 伊富岐神社へ行って、赤鉄鉱の金生山へ登ろうとあらかじめのスケジュール。時間があれば 刀鍛冶のおられる関にも足をのばしたいのだから・・・ まあ 後は風来坊である。

垂井駅の南 宮代地区 南宮神社 参道から南宮神社正面へ

垂井駅から赤い大鳥居を目印に街中を抜け、国道に出て、常夜燈のある石鳥居の所からまっすぐに南に伸びる街道筋を宮代の集落にはいる。落ち着いた古い家並みが続く南宮大社への参道である。

新幹線のガードをくぐると高さ20mを超える朱塗りの鋼鉄製大鳥居。

これを抜けると程なく、南宮山の森をバックに建つ南宮大社の正面へでる。

ここで街道は90度東に曲がるが、その角にある松並木の際に「右 伊勢・養老道 左 垂井」の道標。

右手には朱塗りの大きな楼門が見える。



垂井駅南を東西に走る国道から 南へ伸びる南宮大社への街道筋 2004.11.8.



南宮大社 正面前

朝 早いこともあって、静寂そのもの。「南宮大社 祭神 金山彦命 11月8日鎮座祭」の立て札が立っている。静寂の中とはいえ、次から次へとタクシーに乗った一団がやってきて、南宮神社に入ってゆく。大きな南宮大社のお祭というから、もつと人出の多い祭りと思っていたが、界限そのものは 本当に静かなものである。

楼門をくぐって境内に入ると 正面奥に社殿 その前に舞殿。朱塗りの建物が玉砂利の白 バックの山の緑によく映える。 タクシ - でやってきた一団は次々と「金山大祭受付」の所から社殿に昇って行く。バスでの一行も到着。 いずれも金属加工業の団体や会社の人たちで年に一度のお参りである。

社殿の前には立派な「舞殿」があり、この神社の格式を思わせる。

その舞殿には隅に鞆と炉が据えられ 鍛練場が作られて、ここで鞆祭・古式鍛練が奉納される。

老人が一人舞殿に上り「古式鍛練・鞆祭」が行われる鞆の調整などの準備をもくもくとすすめている。

また、あわただしくテレビの関係者がカメラ位置・カメラアングルの調整をしている。



南宮神社 社殿と舞殿 2004.11.8.



舞殿にしつらえられた鍛冶場と鞆 2004.12.8.

鞆祭が始まるまで、時間があるので、森に囲まれた静かな境内や、後背地の南宮山の上り口である不破高校のあたりまで、ぶらぶら上って、また、境内に帰ってきた。残念ながら この南宮山から流れ出る小さな幾筋かの谷川があるが、鉄の痕跡はみつからなかった。

社殿の端の軒下には鍛冶製品を取り付けた多くの奉納絵馬が飾られ、その下には数々の鉱石も奉納されている。

南宮神社の北 数キ口先の金生山の赤鉄鉱も奉納されている。



金山祭鍛練式 奉納絵馬



奉納された鉱石



年々の金山祭鍛練式(鞆祭)で古式鍛練を奉納した匠たちの奉納絵馬  
「奉行 横座 先手 吹子」の名前が記されている

奉納された絵馬をよく見るといずれもその年々の金山祭鍛練式(鞆祭)で古式鍛練を奉納した匠たちの奉納絵馬である。

「奉行 横座 先手 吹子」の名前が記されている。

奉行：監視役、 横座：司令 火箸で鉄を支え、鍛練作業を指揮、  
先手：鉄を鍛える役、 鞆(吹子)：火をおこす役

鍛練作業はこれらの人たちの合同作業で、毎年 年番で鍛造にたずさわる匠の中から選ばれるのであろう

### 3. 金山祭鍛練式 ・ 鞆祭



10時になって、社殿で神事が行われた後、舞殿には、神主はじめ、正装した鍛練奉納者 舞楽を奉納する人たちが座り、社殿に向かって、祭壇が設けられ、榊とともに「火打石」が置かれ、雅楽が演奏される中で鍛練式が始まった。そして、三々五々 参拝を済ませた人たちが4,50名ばかり舞殿を取り囲んでいる。

【美濃一宮 南宮大社 金山祭 古式鍛練・鞆祭 2004.11.8.】



火打石による 鞆 火入れ式 2004.12.8.



鍛練 2004.12.8.





打ちあがった鉄の奉納 2004.11.8.



舞楽奉納



鞆への火入れは 火打石による火入れ式として行われ、横座・鞆の兼用 先手2人の3人の匠・鍛冶職人の手で鍛練が始まった。

舞殿には上れないので、鍛練の様子は良くわからなかったが、雅楽が奏上されながらの鍛練。

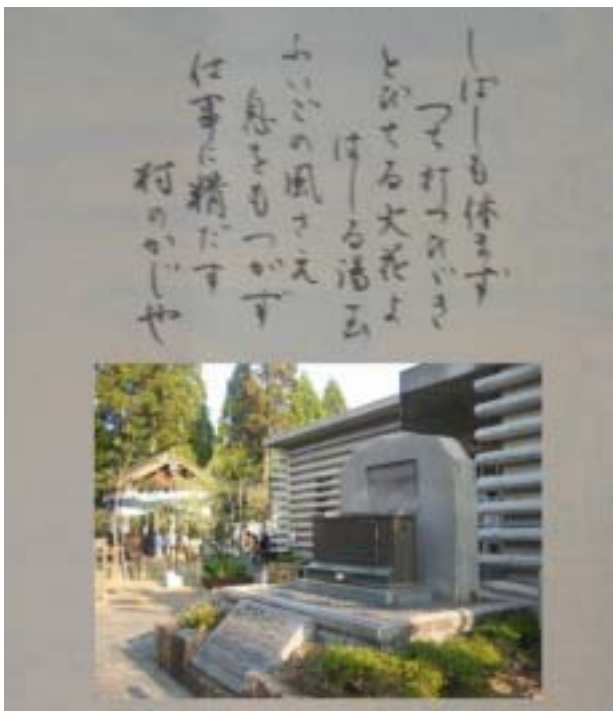
伝統と荘厳さを感じられるこの鞆祭に、伊吹嵐が吹き降ろすこの地はやっぱり、鉄の先進地でなかつたか・・・と思いをめぐらしていた。

「金物の町」兵庫県三木市金物神社 そして 金属工業に従事する人たちの総本宮その創建は古代に遡る南宮大社の2つの場所での「鞆祭」を見学することができた。

いずれも 古式鍛錬を神前に奉納する式であるが、その主役は そばに置かれた「鞆」。鞆なくしては鍛冶・金属加工ができない。

古今東西 時代・場所を問わず、一道具としての扱いでない事に「鞆」の重要性が良くわかる。

「たたらを踏む」「じだんだを踏む」などの言葉を生んだ素地もここにある。



小学唱歌「村の鍛冶屋」

ついぞ 思い起こすこともなくなりましたが、本当に懐かしく 新鮮に頭の中にそのメロディーが響いていた。

2004.11.8. 昼

南宮山神社から井吹への道を歩きながら

Mutsu Nakanishi

小学唱歌「村の鍛冶屋」歌碑

三木市立金物資料館 2004.11.6.

旧暦霜月8日(11月8日)金山祭り・鞆祭 (ふいごまつり)

- 1 金物の街「三木」と三木 金物神社 鞆祭 2004.12.6.
- 2 岐阜県垂井 南宮神社 ふいご祭 2004.11.8

【完】